一、研究主題「親鸞に於ける人間觀」

主題提出者岩倉「親鸞に於ける人間觀」の性格を當時の社會の歷史的性格を以て說明すべきことを提唱す。討議の結果その論旨未だ不備なることを認め、更に「人間觀」一般のより深き研究を要すると決す。

一、次回の研究主題「再び人間觀に就いて」

―前主題提出者への批判的立場より―

開催期日　一月十七日の豫定　（岩倉記）

社會學會

□十二月十五日（火）午後三時より哲學研究室に於いて例會を開く

藝術社會學への前提　成瀨配君（松原記）

教育學會

□十二月十四日第三回例會を開催す

デユイーの教育學に就いて　龍山　義禀君

□一月十五、十六日　京都女子師範學校附屬小學校の研究發表會並びに研究授業を大西教授引卒の下に見學す。（沼口記）

新刊紹介

室町時代小歌集

從來國文學史に於て中世と言へば、直ちに暗黑時代なる詞を聯想する程であつた。そしてまたその事は、彼の華やかな王朝時代や、爛熟せる德川時代の文學と對比するとき、あながち否定出來ない事でもあつた。其處に未だ開拓の手で入れられなかつた點からも、また資料の整備しない點から言つても。然し近時次第に學界の趨勢は此の暗黑の世界に一段と曙光を投げかけたかの觀がある。先頃『國語と國文學』が中世文學研究の爲に尨大なる特輯號を出した如きもその傾向の一半を示すものと言ふべきであらう。斯かる學界の機運に際して本書の出版された事は學界を益する事決して些少ではあるまい。

本書は目次にも示す通り（一）原本を玻璃版にせる部分（一―五〇頁）（二）原本を活字にせる部分（五一―九五頁）（三）「室町時代小歌集」に就いて、と言ふ著者の論說（九七―一七三頁）（四）索引（十五頁）の四部分からなつてゐる。

『この「小歌集」に收められてゐる歌數は、凡べて二百十九首（但し一首重複）、「閑吟集」より稍少ないが、共在するもの三十一首を除いて新たに獲たもの百八十七首を數へる。』『書寫の年代を明かにしないが、少くも慶長は下らぬであらう。』『夙く題

箋の失はれたと言はんよりは、もと題の與へられなかつたものかと思はれる。今假に「室町時代小歌集」と名づける。』と。なほ著者はこの論文に於て「閑吟集」の歌謠と「小歌集」のそれとを對比し其の分化發展の狀態を考證して更に次の時代に生れ來つて近代歌謠を展開したところの隆達節の小歌との關係に究及して『隆達節の小歌と一致するもの及び交渉を有するものは、「閑吟集」にあつては十九首、「小歌集」にあつては六十五首の多きを數へる。これはやがて自庵隆達によつて創められる小歌に歩み寄つた姿であり、その誕生を暗示するもので』ある事を述べてゐる。

とにかく本書の刊行された事は今迄殆んど唯一の資料として「閑吟集」にのみ據らればならなかつたこの當時の歌謠研究上に大なる光明を投ずるものと言ふべきであらう。（菊版一八八頁、著者笹野堅氏、發行所　東京神田萬葉閣、價四、八〇）（尙）

思想を中心としたる　中世國文學の研究

著者は其の「あとがき」に於て「本書は折にふれて書きつけて置いたもの、或はかつて雜誌に發表したものを更に改訂したものであるから、繁簡宜しきを得ない所も多く、時としては重複した所もある」と、本書成立の經緯を述べ、更に表題の「中世國文學の研究」の「中世」に關して、即ち內容に於て取扱へる時代を限定した理由について「本書はもと〳〵平安朝から鎌倉期への思想的展開を中心として眺めたいと言ふのが出發點であつた爲、室町時代に觸れる事は少なかつた」と言つてゐる。

此の書の取扱はうとしてゐる點については其の序說で次ぎの樣に述べてゐる。「……幾多の問題の中から私は先づ中世文學思潮の一、二特色を概觀し、去つて中世精神生活に最も關係の深い佛敎思想を中心として中世思想を瞥見し、三轉してこれ等の思想に裏づけられた文學を斷片的に捉へ來つて俎上にのぼせ度いと思ふ」と。

即ち其の三大綱目についての究明は次の如くである。本論たる(一)中世思想の混沌、調和、統一の項に於て其の中世文學思潮の特色を概觀し、(三)中世無常觀と隱遁思想に於て所謂中世精神生活に最も關係の深い佛敎思想を中心として中世思想を考察し(四)隱遁者の文學以下に於て以上に於て論述せる思想的背景の下に生れた當時の文學について論究してゐる。即ち(四)に於ては長明、西行、兼好と其の作品を觀察し(五)に於ては特に其の兼好の徒然草に就いて究明してゐる。(六)には中世の歌論を(七)は戰記文學の檢討であり(八)は民衆生活と文學との關係の考察である。

本書の出梓された事は、特に佛敎文學の研鑽に於いて深い理解を有たれる著者によつて作り出された事は、近來漸く動きかけた中世文學研究の現狀に大なる刺戟と貢獻とを與へる事は言ふ迄もない事であらう。（菊版　三一二三頁、著者坂口玄章氏、發行所東京神田　六文館、價二、五〇）（尙）

眞宗史の研究

日下　無倫著

眞宗學に於て重要なる一部門を形成し、當然、最初に果さるべき眞宗史の研究が、嚴密なる意味に於て、殆んど實行されてゐない現在、此の方面の權威者、日下前教授半生のアルバイを手にし得たことを先づ喜びたい。

本書は、主として著者が今迄に發表せられたものを纒め、それに、始めての分も加へ、著者の言葉を借りて言へば「現に著述の道程にある眞宗史通論の發足標として」出版されたものである。從つてそれは、各編獨立したものである故に、そこから概說的な理解を求めることは一應困難ではあるが、然し蒐錄の上には一定の方針も看取せられ、讀者には、或る部分に於ては一貫した關係も隨處に認められやう。加ふるに、著者が舊稿に對して綿密なる補正を加へてゐること、及び、宗派人として所屬の宗史を研究するに當つて陷り易い偏見史料に對する意識的遠慮の殆んど見出し得ないことは、著者の歷史家としての忠實さが、飜つて、史料に對して、その探査に、そのテキストクリティークに十分の注意を拂ひ、十全を期して取扱つてゐられること、と相待つて、よく裏書されてゐる。且つ、口繪とも二十九枚の多量の圖版は後學に對する著者の配慮と察せられて嬉しいことである。

著者は、本書の內容を三編に分ち、第一編「眞宗史の研究」に於ては最初に「眞宗諸派の起源に就て」その成立事情を明かして我々に分派の必然性への理解にまで示唆してゐる、蓋し此の研究は、六章の「親鸞聖人壽像の研究」と合せて、特に著者苦心の痕も見出され、それだけに、價値高きものであらう。次に蒐錄の上に一貫した關係の認められると云ふのは、例へば、親鸞聖人に對する研究が廣い視野に於てなされてゐると云ふことである。中「親鸞聖人母公の研究」「萬歲歌詞に現はれたる親鸞聖人」の二文等は、從來閑却されたる實は重要なる方面に手をつけたもので、此等、談義僧の口に語られたり、萬歲歌詞に織込まれたる親鸞聖人が、かへつて、今日の人の考へてゐる以上に、當時にあつては、民間に大きな影響を及ぼしてゐると思はれる。例せばその代表的なものとして、現在猶、親鸞聖人の言葉として、說教僧に依つて、しば〳〵語られる臨末御書などあげる事が出來やう。從つて、今後の眞宗史研究者にとつては、特に、民間の聖人觀及び信仰生活を知る上には、頗る暗示に富んだ問題とならう。第二編所收の「新出の敎化集」もその意味に於て價値高きものである。（因みに、深光寺所藏本は「本文十九葉」とある」は「廿九葉の誤り」五二〇頁參照）

第二編は、主として重要なる「眞宗典籍の研究」を收められてゐる。元來、宗學研究者にとつては最初にテキストクリティークが面倒ではあるが、要求せらるべきであり、それに依つて、更めて確實なる宗學の研究もすゝめられるのであらうが、不幸にして、何故か、我が眞宗學に於ては滿足すべき此の種の研究

の成果を求めることが出來なかつた。たゞ最近漸く活潑になつて來た此の研究に今後を期待する。今本編に收むる數種の「典籍考」は皆それぞれに、その典籍を研究材料に用ふる人達に必ずや安心すべき足場を與へてくれるであらう。

第三編は日本佛敎史に關する十數種の研究を一括したもので失禮な言ひ分ではあるが、著者としては、この編は本書に本編を入れなくてはならぬと云ふ理由があつてではなく、過去のアルバイトを割愛するに忍びずと云ふ程の氣持で附加せられたものかと思はる。從つて本書のレゾンデートルも亦著者の云ふが如くこの編に求めてくるのは如何かと思ふ。にも拘はらず、例へば「善珠僧正の研究」などに、用意周到な研究方法を示して、その傳記を殆んど完成され、以て、日本の唯識、因明の學祖として、今日の佛敎學者が必ず彼の現存する八部の著作には、目を通し、且つ今後益々重視すべき人物の礎石を置かれた如き、或ひは「性的神としての道鏡」「寶般と佛敎」等、興味ある問題を捕へて、豐かな筆を運ばれてゐる如き、本編は本編として、前二編と關係なくとも、高く評價されていゝものであることが認められる。最後に全般の內容目次を揭げて更めて、廣く一般に本書の一讀を薦めたい。第一編眞宗史研究。一、眞宗諸派の起源について。二、親鸞聖人母公の研究。三、萬歲歌詞に現はれたる親鸞聖人。四、親鸞聖人の思想三轉。五、玉日の傳說と親鸞聖人御俗姓集。六、親鸞聖人壽像の研究。七、原始眞宗に於ける荒木門徒の研究。八、眞宗に於ける太子及び七高僧圖像の研究。九、佛光寺派寺院に傳はれる宗祖門侶史料。十、宗門沈滯時代に於ける本願寺善如。十一、本願寺沈滯時代に於ける存如宗主。十二、初期宗學界に於ける西方寺空慧の研究。十三、香月院門下に於ける性相敎の講學。十四、本願寺觀如上人の御事。第二編眞宗典籍考。一、親鸞聖人見寫の選擇集及びその延書。二、敎行信證について。三、東本願寺所藏敎行信證延書のこと。四、敎行信證の古註疏について。五、親鸞聖人眞蹟唯信抄について。六、新出の敎化集について。七、蓮如上人御文草本のこと。八、慧心の往生要集古版本考。第三編、日本佛敎史研究。一、上宮御製疏の書史學的概說。二、行基菩薩の門弟について。三、行信僧都の事蹟について。四、性的神としての弓削道鏡。五、善珠僧正の研究。六、綠野寺一切經に就て、七、古代に於ける國家經典の意義。八、慧心僧都と往生要集。九、鎌倉時代の佛敎。十、日本に於ける繪相觀音經の飜刻。一一、後柏原天皇と超譽上人。一二、寶船と佛敎。一三、四十八願寺趾について。一四、聚珍堂活版と天龍開山御歌。菊版八三八頁、（發行所　京都市東洞院通三條上ル平樂寺書店、定價六、〇〇）

（亨）

オランダの Leiden の敎授 Laber が寺本敎授著作、干闐國史を見て、非常に珍らしいがり、九月開催の東洋學會の席上で、東洋學研究の貴重な史料として披露したとの由、本學としかゝる著書を出したことは慶すべきことである。